（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	加川真美
論文題目	フィリピン・東ネグロス州の山間地域における人々の生存基盤の変容 －農村と都市のつながりに着目して－		

（論文内容の要旨）

本論文は、フィリピンの東ネグロス州を対象として、都市の発展と山間地農村の変容の関係を、農耕形態、都市と農村の経済的連鎖、人口動態、環境問題、地方行政、土地利用などの観点から分析し、現代フィリピンにおける都市－農村関係の動向について論じることを目的として行われた研究であり、序章、第１～７章、終章から構成される。

序章では、急速な経済成長を続けるフィリピンで、都市の外縁的拡大にともなう離農者の増加や未利用地の急速な開発が、食料自給・環境保全の観点から問題視されてきている。そのうえで、本研究の目的と研究方法を述べる。

第１章では、ネグロス島は西と東で地形が異なり、東ネグロス州の山間地には小農による農地が広がる。州都ドマゲッティ市は近年急速に発展している。ドマゲッティ市の後背山地には、自給と商品作物を組み合わせた独自の農業が展開していると調査地の概要を述べる。

第２章では、ドマゲッティ市に隣接するバレンシア町の地理的特徴と行政について述べる。都市近郊ながらバレンシア町には1,500メートル以上の標高差があり、起伏に富んだ地形は、各地に多様な生態・生産環境をつくり出している。町には地熱発電所があり、財政的に恵まれている。町役場は、道路などのインフラ整備、パウナイと呼ばれる産直市場の運営など、住民の福利厚生に取り組んでいることを明らかにする。次章からは、このバレンシア町の特徴的な３村について考察する。

第３章では、山間地域の奥地農村として、東斜面奥部とドブドブ村への都市の影響について述べる。東斜面奥部は、地熱発電所の道路インフラ整備により都市とつながり、農業は急傾斜地のトウモロコシ・ココヤシの中心的栽培から、パウナイを通じた都市向け野菜生産や果樹栽培に移行していることを明らかにする。最奥地の西側斜面のドブドブ村では2008年ODAにより道路整備後、パウナイの導入によって、焼き畑農業から、都市向けの野菜生産地域へと変貌しつつあると記載する。インフラ整備や生産・流通・販売網などの充実によって、都市との繋がりが山間地域での農耕様式を変化させると考察する。

第４章では、タリニス山の尾根上のルンガ村について述べる。ドマゲッティ市の発展をうけて、アバカという山間地農業に適した作物中心の村から都市向けの果樹栽培と都市労働者へ生業選択が多様化し、農民の減少と労働者の増加が生じていると考察する。

第５章では、都市近郊の山間地農村ボンボン村の農業と慣習法の変化について述べる。この村では専業農家が減少しているにも関わらず、農地面積が減少せず、兼業化が進行し、副業としての農業が持続されると記載する。ココヤシ園は維持され、果樹栽培と多年生の花卉生産が増加する。果樹栽培は農外就労に出ない人々へ収穫作業と

いう雇用の機会を提供し、ココヤシからの落下物・山菜など自由に使える資源の慣習的利用は維持され、パウナイの存在により商品化が可能となると考察する。

第６章では、さらに、ボンボン村の生活様式の変化について述べる。マニラへの出稼ぎはなくなり、村に残って雇用労働に頼ることが多くなる。相続により土地の細分化と共住化が同時進行する。サラゴンなどの自給作物への依存から、コメなどの購入が増加する。各世帯は所得に応じて教育レベルや伝統医療か西洋医療かを選択する。このような現金所得・支出の必要性から、旧来の労働慣行も大きく変化すると記載する。しかし、身近な地方都市の影響により市場経済の影響が大きくなっているが、土地利用形態、食事様式や社会関係は山間地農村の特徴が残ることを明らかにする。

第７章では、このボンボン村における一世帯主であるパパイビンに焦点を当て、５章と６章で、考察してきた山間地農家の変貌を考察する。彼は小作人から農地を購入、自作農になる。長女はマニラに出稼ぎ移住、次女と三女は農民、四女は農外就労を選択する。遺産分割の後、各子供は、農業従事、農外就労、農地から宅地へ土地の相続をし、農業も農地も残り続けることを明らかにする。

終章では、これまでの章に総合考察を加える。山間地農村におけるセブアノの人々の移動は、定着後、周辺都市での就労や都市へ農産物を売りに行くという日帰り移動へと生活様式が変わる。都市の周縁拡大化が進行するが、伝統的慣習や作物種などは、それぞれの農村としての特徴が残ると考察している。山間地農村における農業や生業の柔軟性と生活様式は、熱帯山間地農村は都市と柔軟に関係することで、各村はむしろ温帯野菜や花卉の生産地として重要度を増すと考察する。山間地農村には、道路インフラ整備や教育に、パウナイのような生産から流通・販売まで含めた柔軟な産直市場といった低所得農民でも参入出来る行政の仕組み作りが重要と結論づける。さらに、山間地農村は常に低地の都市の影響を受けて変化し、都市の発展が山間地農村の変化を呼び起こし、農耕形態を変化させ、都市と農村の経済的連鎖を強めていると結論する。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

熱帯地域の山間地農村では、斜面の土地の利用として焼き畑耕作が広く行われている。これら山間地農村への市場経済の浸透により、斜面にある農地や森林は、現金獲得源として、その利用方法が変化している。例えば、焼き畑をはじめとした在来の山間地土地利用から、パラゴムノキやオイルパーム、早生樹の植林地等に土地利用転換が広く進行している。これら斜面の土地利用変化は、温暖化、土壌侵食、水源涵養の減退、生物多様性の減少等の環境問題と密接に関連しているので、伝統的土地利用と新たな土地利用との調和を図り、地域に適応した利用方法を見出すことは重要な課題である。本論文は、フィリピンの東ネグロス州において、地域住民の移住の歴史、生業形態の変化、都市の発展と山間地農村への影響を長期に渡る臨地調査により記述し、山間地農村開発をめぐる諸問題点を総合的に検討する試みで、その学術的貢献は以下の諸点である。

第一に、山間地農村の変容を、都市へのアクセスや地理的立地の違いに着目して比較検討することで、地域を立体的に把握したことである。州都ドマゲッティ市から最も奥深いドブドブ村の場合には、焼き畑農耕から都市向け野菜生産や果樹栽培に移行、山頂尾根に位置するルンガ村の場合には、アバカという山間地農業に適した作物中心の生産形態から都市向けの果樹栽培と都市労働へ、都市近郊のボンボン村の場合には、農地面積を減ずることなく兼業化が進展して、副業としての農業により果樹と多年生の花卉生産が増加することなどを明らかにした。同じバレンシア町に位置する各山間地農村の変容が多様であることを明示した。このように対象地域の多様性を丁寧に捉えた点は、地域研究への貢献として評価できる。

第二に、行政の施策がバレンシア町の各村落住民の生存基盤に及ぼす影響を検討した点である。町にとっての重要な地熱発電開発に伴うインフラ整備によりこれまで隔絶されてきた各村落への道路アクセスが改善され、それにより都市との関係を結ぶことで、新たな生存基盤が構築された。その過程を詳しく検討している点は地方自治行政学への貢献として評価できる。

第三に、バレンシア町では、行政指導の下に、パウナイ（産直市場）を設置して、流通の安定化を図った点を多面的に検討したことである。山間地農村への市場経済と商品作物の浸透に伴い住民の生業と生活は市場の変化に大きく影響されることになる。商品作物が売買できる市場の確保と流通の安定のために産直市場が重要であることを住民の生業と生活の視点から検討した研究結果は、地域経済学への貢献として評価できる。

第四に、大都市や地方都市の発展による就労機会の増加が山間地農村の生業と生活に与える影響を明らかにした点である。山間地農村への市場経済の浸透は、世帯における現金支出の増加を強いる。しかし、農業に従事している世帯にとっては、村内での現金獲得は容易ではないので、世帯構成員の一部は、マニラなど大都市での出稼ぎに従事する。一方で、地方都市である州都ドマゲッティ市の発展は、遠隔地への出稼

ぎに代わって、地域内での就労機会を提供した。サラゴンと総称されるイモ・バナナ類の栽培が、食糧源として確保されることで不安定な農外就労を補い、その結果として、多就労化が実現しているとの指摘は、農村開発学に重要な示唆を与えている。

第五に、熱帯開発地域で広く行われている焼き畑について、山間地への移住民は、移住元の生業を移住先で継続する。農業においては、耕作方法や作物種を移住先に持ち込む。本論の事例では、バレンシア町への移住民は、伝統的にサトウキビ、トウモロコシ、サラゴン、アバカなどの作物を用いて、農耕を行ってきたためドブドブ村を除いて、焼き畑は行ってこなかった。この事例は、山間地の土地利用における例外的な事例である。移住を伴う山間地農村の変容が一様に起きているという報告に対して、土地利用における移住元の生業履歴が重要な要因であるとの指摘は、山間斜面の土地利用を研究する際の貴重な事例を提示した。また、協議されているLULUCFやREDD+など、山地斜面の土地利用の研究への重要な貢献である。

以上の諸点は、長期間の参与観察のデータと複数の村落の比較研究に基づく地域研究の成果として高く評価できる。

よって本論文は、博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成26年3月31日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。